時の風

今に問う〈山岳〉〈文化〉の役割

2013.06

【日本山岳文化学会　会報投稿原稿】

田中文夫（神奈川県）

2011.3.11 東日本大震災に対し、山岳文化はどのような貢献が成せるか、引き続き考えている。その答えは当初より明快であったのだが、そのことを説明する言語の問題として、常々不十分さを感じていた。それは山岳文化だけの問題ではなく、今の〈文化〉が抱える諸問題にも重なる。山岳文化を「Mountain Culture」と標記するように、「Culture（文化・教養・修養)」の問題として述べれば、「山岳文化学会」の指向性にも関連してくる。

「Culture（英）*Kultur*（独)」は標記のとおり、外来語である。〈文化〉を日本的理解とすれば辞書に見るよう､「人間が本来の理想を実現していく活動の過程であり、その精神的所産を称し〈文化〉としている」。同様に、物質的な所産を称して〈文明〉としている。文化と文明は「対の構造」となり、進化の歴史を重ねている。

カントは、技術と科学によって文明化を加速させ、自由を拡大・濫用させる人類の〈自然〉なありようを克服するため、新たな〈文化〉概念を提示する。それは人間社会の義務的なあり方として、自律した個人の確立とともに、道徳性への陶冶（*Kultur*）による公民的社会概念の提示となる。

カントの抽象的理念、現実的空虚さと無力さを批判したヘーゲルは、時代に根ざした「人倫における陶冶」を実質的な問題とし、言語に係る「理論的教養」概念を、労働と他者を介する社会的相互依存の中での個の自立と、精神的にも自律していく「実践的教養」概念を併せ、「教養の哲学」として〈文化〉に位置づけた。

しかし現実の社会的分業の深化は、専門化と高度化をうながし、「教養の諸相」は機能主義的自律化（客観化）による実証主義（科学）へと一元化されていく。労働や他者を介在する関係性の体験等から得る主観的個性・感性は、そのものだけを対象としているゆえ､客観性に欠けるとして科学的実証から除かれていった。

ヤスパースは実存哲学の中で「教養的思惟」を分類し、①作業的思惟、②調整的思惟、③行為的思惟、④科学的思惟、の四類型にまとめた。「行為的思惟」における「行為」とは、本質的な一回限りの状況において、繰り返すことも、後戻りすることもできない決断から成される行動としている。それは「決意する思惟」として、目的合理的な帰納手法で実証しがたいものであり、衝動を支配する「意志」の存在を表すものとして、思惟と意志の根源における一体性の中で主観的個性・感性を思惟の中に位置付けることとなる。

シェーラーは知識を三類型に分けた。①支配もしくは作業の知識、②本質もしくは教養の知識、③形而上学的もしくは救済の知識。一つないし少数の優れた意味深い範例から獲得・統合された知識を「本質の知識」とし、広義の知的営為全体の中で②の「本質もしくは教養の知識」として位置づけ、世界の根源を追究しつつ本質への問いに答える理性とした。

以上における共通な認識は、今に生きる生活に根ざした「教養の世界認識」の

存在を前提として、理論と実践を包括した概念組み直しの試みである。実証主義における「知識・思惟」の限界を明らかとし、その先に望むべく新たな世界の創出となる。「物の豊かさから、意味の豊かさへの転換」、「物量から、価値多様性への転換」、「文明の豊かさから、文化の多様性への転換」という、パラダイムチェンジを促すものとなる。このことは、生活を直接的に維持・進化させる役割の“Civilization”（文明）の一方向性に対し、意識によるバイアス制御機能をもつ“Culture”（文化・教養）を「対の構造」として、バランスを図ることにある。

山岳文化は〈自然〉と〈文化〉が織り成す独自な総合性を含んでおり、両者は「対の構造」を成す。このことを帰納的に解明し、社会に役立つことの説明を演繹的におこなう努力こそが、文化学会たる役割ではなかろうか。そのことは、東日本大震災に果たし得る、山岳文化の地道な〈文化〉活動でもある。

山岳体験や成果を実証するデータは豊富にある。そのデータ整理と記録を来歴として残すことは、必然な作業といえる。それに加え前記哲学に引用したよう、人々の心に迫る教養深き思惟と知識への探求も、必要となる。問題は「対の構造」として捉え、相互バランスを図ることにある。山岳文化の〈文化〉的認知度は低く、この探求を生業にすることは難しい。独立した学問分野や学校教育の科目にもない。山岳文化の帰納的要素は多くの既成専門分野とも重なり、それぞれは高度な専門分化が成されている。この状況における山岳文化の独自性は、日常生活と異なる、山岳自然体験の「非日常性」にあろう。「非日常性への意識と取組」こそが、大震災等の非日常的緊急事態における人々の、心のありように役立つことを可能とする。「日常の無意識」な意識の中に、「非日常の意識」を取込むことである。

今、大学教養講座に企業リーダーも参加していると言われる。グローバルなビジネス世界で有効なコミュニケイションを図るためには、〈世界〉を語り合える教養と言葉が不可欠となる。インターネットに見る東京大学教養講座の中身は、宇宙、時間、エネルギー、現代社会、生と死、人工知能、夢、海、森、文化、文明、無限と有限、偶然と必然、等々多彩である。まさに現代〈文明〉は知識、技術、人工物が複雑に進化し、それらをシステムとして捉え直す「複雑系」の中にある。

加えて、ニーチェが「神は死んだ」とするように、信仰をもたない無機質な心は拡散している。インターネット・ウエブの無機質な〈情報〉は、使う者の身分格式を問わないマネーと同じ、自由度をもち、光の速さで世界を駆け巡る。言語や映像はデジタルデータに変換され、圧縮-伝送-解凍-再生される。それら全ては実態であるがごとく再生されるが、本質は電子符号と化した信号である。そもそも人間の五感全ても、ニューラルネットワークと脳機能によるイリュージョンだとして、認知科学は脳の来歴を「虚」の世界とみなす。しかし体験の五感を意識・無意識に記憶する脳の来歴「エピソード記憶」は、自らを主体として語り、考える思惟の心の基底とされる。生身の山岳体験（エピソード記憶）がいつまで必要とされるか分からないが、現代の無機質社会に心の開放を望む有機的人種が存在しているのも確かである。であるならば、自然（山岳）と文化（教養）のバランスを図るべく山岳文化の役割は、これまで以上に必要とされよう。